
終わりのない永遠のゲーム

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりのない永遠のゲーム

【Nコード】

N4574P

【作者名】

紅の雲雀

【あらすじ】

“ 終わり ” のない世界。

“ 永遠 ” と繰り返される世界。

いつになったら “ 終わる ” のか分からない。

そんな彼らの “ 永遠 ” のゲーム

連載そうそう死にました……

この世界には“終わり”“最後”というものがある。
物には“最後”がある。

“人生”っていうのにも“終わり”がある。
全てには“最後”がある。

俺は“最後”って言葉が嫌いだ。
楽しい時間は続かない。

楽しかった夢は終わり、再び辛い現実に連れ戻される。

だから“終わり”のない世界に生きたい。
いつまでも続く幻想の世界で。

上坂三春、八月十二日……午前十一時二十三分……死亡。
事故死。

そして“最後”に俺の“人生”が“終わった”

今は夏休み、外では蝉が五月蠅い。
俺、上坂三春は死んだはずなのに、起きたらそこは自分のベッドの上だった。

しかも時間は夏休み初日の七月二十五日。
過ぎたはずの時間……。
デジャブ？

そんなのが現実にあるのか？
「いつたい、何だったんだ……」

「夢だったのか？ それにしてもリアルな夢だ……。
「とりあえず外にでるか」

俺は玄関に行きサンダルを履き外に出る。

夏ってことだけあって外はやっぱり暑い……。

外を歩いても何も変わっていない……。

「やっぱり夢だったのか……？」

何一つ変わっていない普通の街。

俺が死ぬ前に見た普通で何も変わっていない街。

「悪夢なのか……」

そして俺は家に戻った。

俺はそれから夏休みをエンジョイした。

遊んだり宿題をしたり。

そして日にちは十二日になった。

その時俺は何も警戒していなかった。

悪夢のことを完全に忘れていた。

上坂三春、八月十二日……午前十一時二十三分……死亡。

「うわあああああああああああああ……！」

俺は大声を叫び起きた。

そこは俺のベッドの上だった。

携帯を見て日にちを確認した。

「！」

七月二十五日……夏休み初日……。

「何だこれ……？」

まるで夏休みと俺が死ぬ日を永遠とループするような……。

そこでいきなり電話が鳴り出した。

……おかしい、今回は電話なんてきてない……。

不審に思った俺だけど自然と体が動き受話器を取った。

「……もしもし」

「もしもし？　こちら天界ですが？　神坂三春さんでしょうか？」
「はい……俺が上坂三春ですけど」
「いきなりですが、何か言いたいことはありませんか？」
「何故俺は死んでない？」
「やっぱり気がつきました？　二回も死ぬと異変に気づきますよね」
「で、どうなんだ！」
「死なない理由ですか？　それは貴方が“終わり”を望まないから。貴方は」

「でも！　人は普通に死ぬ！」

「？　貴方はもう一つの異変に気づいていないんですか？」

「異変？」

「そう異変。貴方は生きてませんよ」

「そういうことだ？」

「貴方は死んだでしょう？　ここは死後の世界」

「で、でも！　ここは俺が生きていた世界だ！」

「そうですね？　って言うてもここに居ては気づきませんよね。――

旦電話切ります」

そうして相手は電話を切った。そして俺の電話に電話をしてきた。

「それでは外に出てください」

「ああ……」

言われたとおり外にでた。

「貴方は前回何をしていました？」

「えーと……確か家でゲームしたり勉強したり……」

「それでは外には出てないんですね」

「ああ……」

家には大体の食料もあつたし、出る必要がなかったからな。

「それではデパートに行ってください」

「分かった……」

俺は自転車に乗りデパートに向かった。

そして途中で気づいた。もう一つの異変に。

デパートの駐車場には車一つなかった……。そしてここに来る途中人一人出会わなかった……。

「お気づきですか？」

「ああ、途中で気がついた……」

「これがもう一つの異変」

「この世界には俺しか居ないのか？」

「いえ、この世界には貴方に似た人がいますよ」

「ど、どこに！」

「それでは、貴方の通っている学校に行ってください」

「そこに居るのか!？」

「さー？ それは行ってみてのお楽しみです」

俺は急いで自転車に乗って学校に向かう。

やはり道には車も人もいなくて静かだった。

その静かな空間に一人でいると思うと、怖くなってきた。

「ハア……ハア……つ、着いた……」

「あ、着きました？ では生徒会室に行ってください」

生徒会室？ 3階じゃないか！ 疲れたのに……。

で、着いたわけだが……緊張するな……。

「よし……失礼します！」

俺は勢いよくその扉を開けた。そこには口を開けビククリしている数人の生徒がいた。

「び、ビククリした……まだ人が居たのか……」

「ビククリさせてスママセン！ でも俺以外の方が居てよかった……」

……

そしていつの間にか電話が切られていた。いったい誰だったんだろっ？

「それにしても何でここに来たの？」

「いきなり電話が着たんです」

「電話？」

「はい」

「相手は？」

「分かりません……」

「まあ、取り合えずようこそ！」

ほっとした……優しい人で。

「じゃあ自己紹介するね。俺は神斬直哉。かみきりなおや一応この“グループ”のボスをしてる」

「……僕は神無風葉。かみなしかぜはよろしく」

「私は神琶悠。しんわはるかよろしくね！」

「ウチは神星優希。しんせいゆうきよろしく」

「俺は神坂三春です。よろしくお願いします！」

「で、自己紹介も終わったし。仲良くしようぜ」

本当に良かった優しそうな人たちで。

そういえばこの人たちも死んだ人なんだよね？

「そういえば三春くんって能力あるの？」

「能力？」

「ってことは分からないの？ この世界の“ゲーム”を」

「ゲーム？」

「この世界は神様に創られたもう一つの世界。そしてその神様は俺たちをこの世界に閉じ込めた」

神様が……？

「そして俺たちがここから出るためには一人一人条件があるんだ」
条件？

「その条件を探すために与えられた能力。命懸けのゲーム」

まあ、もう死んだんだけどね。と、神斬さんが言った。

「え？ 命懸けってことは大変なんですか？」

「うん、だから能力があるんだよ。その内……いや、もう分かるかな。校庭を見て」

校庭何かあるんだろうか？

「！？ 何これ……」

「これで分かった？」
外には大きな鬼がいた。
「でも安心してアイツ等は校舎を攻撃できないから」
「あ、あの！ 俺の能力って何ですか？」
「さあ？ その内使えるようになるんじゃない？」
「その内……」
「さあ、校庭に侵入者だ。速やかに帰ってもらおうぜ」
「了解した……」
「了解だよ」
「りよ〜かい」
4人は走って外に出た。
「さーて視界に入るゴミを排除にない」と
「下がってる、俺が殺る」
「ふ〜カツコいい。ウチはここで見てるから」
「無駄にでかいな……それに僕を見下すな、ム力つくから。僕の前で塵と化せ」
神無くんの周りに凄い風が……。
「全てを切り刻め」
その風は鬼を切り刻み、傷つけた。
「空気を圧縮しろ」
そうとうと神無くんの手を中に風のボールみたいなのが現れた。
「全てを破壊しろ」
そのボールみたいなのを神無くんが鬼にぶつけた。
鬼は大きいはずなのにその風のボールで吹き飛んでしまった。
「やはり雑魚だな」
「やりましたね」
俺はただビツクリすることしか出来なかった……。
俺にもあんな能力が使えたら。
「まあ、焦らず自分の能力が何なのか探せばいいよ。条件もね」

背景は知ってる世界なのに、この世界は知らない。

まったく知らない人たちと出会い。

まったく知らない現実を見せ付けられ。

信じて言っただけが無理だ。

でも俺がここから出るにはこの現実を受け止めなければいけないらしい。

“終わり”は嫌いだけど。

こんな“永遠”は勘弁だ。

だから俺はこの人たちについて行く。

この世界から出るために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574p/>

終わりのない永遠のゲーム

2010年12月12日15時25分発行